

## 水産教室を通してつながる南伊豆青年部

伊豆漁業協同組合 南伊豆支所青年部  
平山 善太郎

### 1. 地域の概要

私たちの住む南伊豆町は、静岡県の東部、伊豆半島の最南端に位置し、東を相模灘、西を駿河湾、南は太平洋と、三方を海に囲まれた、海岸延長 57.4km を有する人口約 8 千人の町である（図 1）。青く綺麗な海や岩礁などの変化に富んだ海岸と天城山脈より連なる山が織り成す壮大な自然美、黒潮がもたらす温暖な気候、至るところで噴出する豊富な湯量の温泉などを目的として、毎年数多くの観光客が訪れる。



図 1 南伊豆町の位置

### 2. 漁業の概要

伊豆漁業協同組合（以下、伊豆漁協）南伊豆支所は、平成 21 年 4 月に周辺の 7 漁協が合併した伊豆漁業協同組合の 1 支所で、正組合員 83 人、准組合員 1,046 人で構成されている。地域の漁業はキンメダイなどを対象にした一本釣り漁業、サザエやアワビなどを対象にした採介藻漁業、イセエビを対象にした刺し網漁業などが中心で、令和 4 年の水揚げ量は 33 トン、水揚げ金額では 1 億 1 千万円であった（図 2）。なお、一本釣り漁業は下田、伊東、沼津などに水揚げするが、令和 3 年 11 月～令和 4 年 10 月のキンメダイの水揚げ量は 90 トン、水揚げ金額は 1 億 7 千万円であった。

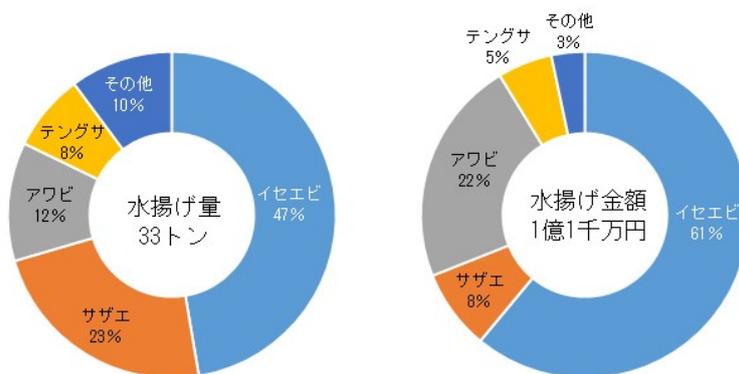


図 2 伊豆漁協南伊豆支所における水揚げ量および水揚げ金額（令和 4 年）

### 3. 研究グループの組織と運営

伊豆漁協南伊豆支所青年部の前身である同地区青壮年部は昭和 40 年に結成されるも、その後は高齢化と後継者不足により解散となっていた。その後、平成 8 年 3 月に

漁業に限らず、遊漁船業、ダイビング案内業など南伊豆の海とともに生きる若者を中心に青年部として再始動し、現在 40 人の部員で活動している。これまで水産資源を持続的に利用するために、マダイ、アワビなどの放流事業やイセエビの資源管理などに部員一丸となって取り組み、資源の増大に努めてきた。さらに、平成 25 年に伊豆漁協南伊豆支所および N P O 法人伊豆未来塾と共同で水産多面的機能発揮対策事業の活動組織である伊豆 F N Y 活動組織を結成し、地域住民と一体になって行う海岸清掃やダイバーによるサンゴの生育場所、種類、個体数などの調査を行っている。

#### 4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

旧青壮年部の解散理由は高齢化と後継者不足であり、再結成された青年部を存続させていくためには、「担い手確保」が重要となる。そのためには、地元の子供たちに漁業および南伊豆の魅力を知ってもらうことが重要となる。そこで、平成 8 年の青年部再結成直後から南伊豆町教育委員会と共同で海の魅力を伝える水産教室の企画開催に取り組むことになった。また、部員の中で漁業以外の業種としては、遊漁船案内やダイビング案内などの観光に携わる者が多く、水産教室では活躍の場も多い。青年部存続のためには、担い手確保と並んで部員の中の「異業種間の交流」も重要となるため、青年部活動の軸として水産教室は適していると考えられた。

#### 5. 研究・実践活動の状況および成果

記念すべき第 1 回は平成 8 年 7 月に開催した。当初の内容はヒラメ稚魚の放流、漁船への乗船体験、南伊豆の漁業についての講義、イセエビ体重当てクイズ、バーベキュー大会であり（図 3）、無事に開催できた。しかし、初回だったため、反省点も多く、水産教室の翌月に行った反省会では、「港と見物ポイントの間の航行がつまらなかった」「南伊豆の漁業の講義の話が長すぎた」などの意見が交わされた。これらの試行錯誤を繰り返し、次第に子供たちが楽しめるような「体験モノ」が充実する方向にブラッシュアップしていった。

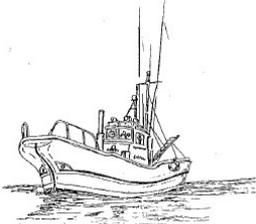
<p>『第 1 回水産教室』実施計画書</p>  <p>日時 平成 8 年 7 月 2 3 日 (火)</p> <p>場所 南伊豆町小箱 小箱漁港岸壁</p> <p>南伊豆町漁業協同組合青年部</p>	<p>8:10 非喫集合・受付開始</p> <p>8:40 開校式</p> <p style="margin-left: 20px;">1. 開会 2. 部長あいさつ 3. 漁協組合長あいさつ 4. 「水産教室」実施の説明・注意事項 5. 閉会</p> <p>9:00 ヒラメ放流</p> <p>9:30 体験乗船</p> <p>10:00 体験航海出発 小箱漁港～石廊崎灯台～種子元島～小箱漁港（別紙航海図参照）</p> <p>11:00 体験航海帰港</p> <p>11:20 「南伊豆の漁業」の話し</p> <p>11:30 「イセエビの体重当てクイズ」大会</p> <p>11:45 開校式</p> <p style="margin-left: 20px;">1. 開会 2. 部長あいさつ 3. 閉会</p> <p>12:00 バーベキュー大会</p> <p style="margin-left: 20px;">「イセエビの体重当てクイズ」結果発表</p> <p>13:00 自由解散</p>
---	--

図 3 第 1 回の実施計画書（当時の資料）

第 8 回（平成 15 年）では、複数の体験コースを企画し、子供たちの船酔いのしやすさを考慮してコースを選択できるようにした。この回では、船酔いをしない人向けに

「沖釣り」と「水平線見学」、船酔いを少しする人向けに「無人島上陸」と「海岸線クルージング」、船酔いをする人向けに「おさかなクッキング」と5つも体験コースを準備した(表1)。実際には、参加状況の関係で「海岸線クルージング」と「水平線見学」は中止となったが、それでも充実した体験企画となった。第12回(平成19年)では、「シュノーケリング教室」を開催したが、その際は子供たちの素潜りや水泳のスキルを事前に調査するなど、水産教室の内容に合わせて事前準備を入念に行った(図4)。なお、この時は部員内のダイビングインストラクターが活躍し、複数の業種がいる青年部ならではの企画となった。このように、第1回からの試行錯誤が功を奏して、体験モノが充実し、子供たちの評判が非常に高い企画となった。

表1 第8回の体験コース一覧

コース名	内容
無人島上陸	静岡県最南端である「神子元島」まで漁船で航行 灯台内で下田海上保安部職員の説明を受ける
沖釣り	遊漁船を用いて沖釣りの体験を行う
海岸線クルージング	石廊崎や大瀬などを沖から見学する
水平線見学	大島や銭洲まで航行して水平線を見学する
おさかなクッキング	南伊豆で獲れるイカを活用した「イカめし」をつくる

学年	氏名	保護者	住所	電話番号	沖釣り	素潜り	水泳	シュノーケル	足ひれ	ポイント
					1	できる	得意			23
					2	できる	得意			21.5
					3	できる	普通			23
					4	できる	得意	得意		22.5
					5	できる	得意	得意		23
					6	できる	得意	得意		23
					7	できる	得意	得意		23
					8	できる	得意			22
					9	できる	得意	得意		22.5
					10	できる	得意	得意		22.5
					11	できる	得意			22
					12	できる	普通			22
					13	できる	得意	得意		20
					14	できる	普通	得意		23
					15	できる	得意	得意		24
					16	できる	得意			24
					17	できる	得意	得意		24.5
					18	できる	得意	得意		24.5

図4 第12回の事前準備

(当時の資料:子供たちの情報整理)

第8回ごろには軌道に乗ってきた水産教室だが、南伊豆町の子供の数は徐々に減少し、これに伴って少しずつ参加人数も少なくなった(図5)。そこで、開催規模の確保のために、第13回(平成20年)から対象を小学5~6年生から4~6年生に拡大した(図5)。また、参加側の子供たちだけではなく、開催側である青年部も南伊豆町の全体人口の減少に伴い、結成当初(平成8年)の70人に比べて平成23年は36人と少なくなっており、青年部と南伊豆町教育委員会では今までのイベントの存続が難しくなってきた。そこで、第19回(平成26年)以降は水産多面的機能発揮対策事業の活動組織である伊豆FNY活動組織として対応している。このように、限られた人材で教室を運営できるよう、現実的な運営方を模索してきた。

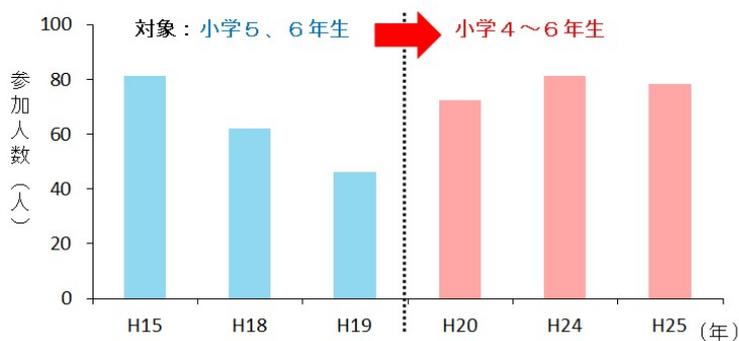


図5 水産教室の参加人数推移

第1回から企画を振り返り、内容を表2にまとめた。近年については内容は一定ではないが、始めに「イカ干物加工体験」を行い、その後に「磯遊び」または「クルージング」、最後に「バーベキュー」という流れが多い。その他のユニークな企画だと、

第17回（平成24年）と第18回（平成25年）の海上アスレチックである。これは、妻良（めら）という地区に夏季限定で海上にアスレチックが設置されるため、それを利用した企画である。このように、第11回（平成18年）までは小稲（こいな）という地区を中心に開催してきたが、第12回（平成19年）以降は地区ごとにさまざまな企画を開催をしてきた。

特に企画の中で磯遊びは人気であり、第21回（平成28年）は船でしか行けない「ヒリゾ浜」という場所で磯遊びを楽しんだ。この時は、磯遊びの後に参加者でかまどをつくり、南伊豆の磯の貝を使った味噌汁づくりを体験した。南伊豆の自然と水産物に触れ合う良い機会をつくることができ、子供たちは大はしゃぎであった。

何度も水産教室に参加してくれる子供も多く、例えば平成26年に参加した小学4、5年生は翌年に55%、平成27年に参加した4、5年生は翌年に60%も参加し、水産教室のファンもできた。令和2年以降は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、水産教室は開催中止を余儀なくされているが、令和6年現在、再始動に向けて検討中である。

表2 水産教室開催実績（過去資料がなかった年は未記載）

回次	年	開催地区	内 容
1	H8	小稲(こいな)	ヒラメ放流、乗船体験、南伊豆の漁業講義、イセエビ体重当てクイズ
3	H10	小稲	イカ干物加工体験、ヒラメ放流、乗船体験
4	H11	小稲	イカ干物加工体験、ヒラメ放流、乗船体験
5	H12	小稲	イカ干物加工体験、ヒラメ放流、乗船体験
8	H15	小稲	イカ干物加工体験、グループ別体験教室(無人島上陸、沖釣り、おさかなクッキング、水平線見学、海岸線クルージング)⇒水平線見学と海岸線クルージングは人数集まらず中止
11	H18	小稲	イカ干物加工体験、グループ別体験教室(無人島上陸、沖釣り、シュノーケリング)
12	H19	大瀬(おおせ)	イカ干物加工体験、グループ別体験教室(無人島上陸、沖釣り、シュノーケリング)
13	H20	大瀬	イカ干物加工体験、グループ別体験教室(無人島上陸、沖釣り、シュノーケリング)
17	H24	妻良(めら)	イカ干物加工体験、グループ別体験教室(クルージング、海上アスレチック)
18	H25	妻良	イカ干物加工体験、グループ別体験教室(クルージング、海上アスレチック)
19	H26	大瀬	イカ干物加工体験、磯遊び、味噌汁づくり、マダイ放流
20	H27	大瀬	イカ干物加工体験、グループ別体験教室(無人島上陸、磯遊びと味噌汁づくり)
21	H28	中木(なかぎ)	イカ干物加工体験、磯遊び、味噌汁づくり、海岸清掃
23	H30	大瀬	イカ干物加工体験、グループ別体験教室(クルージング、磯遊び) ⇒荒天のためイカ干物加工体験のみ
24	R元	大瀬	イカ干物加工体験、グループ別体験教室(クルージング、磯遊び) ⇒荒天のため中止
-	R2以降	-	新型コロナウイルス蔓延のため休止



写真1 ヒリゾ浜に向かう青年部の渡船



写真2 磯の貝を使った味噌汁づくり

南伊豆町の全体と14歳以下の人口は減少傾向にあるが（図6）、青年部員数は平成23年～令和5年にかけて40人前後で維持できている（図7）。これは、長年にわたって水産教室を継続した効果であると考えられる。実際に、私自身は第3、4回の水産教室を経験して青年部員になっている。その時の企画は「イカ干物加工体験」「体験乗船」「ヒラメ放流」であった。体験乗船を通して「漁師ってかっこいい」と思ったことが、漁業者になったきっかけである。私以外でも水産教室を経験して、同じおもいで部員となった漁業者が数多くいる。このことから、水産教室によって青年部結成当初の目的の一つである「担い手確保」の達成はできたといえる。

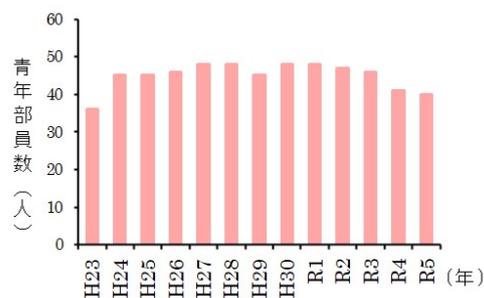
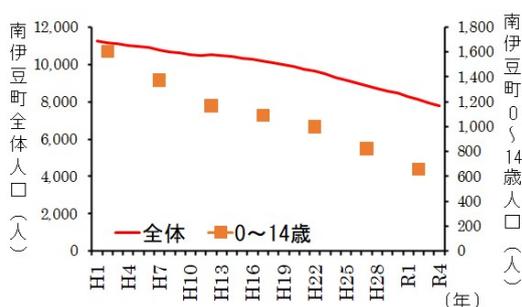


図6 南伊豆町の全体人口と0～14歳人口（国勢調査 総務省より） 図7 伊豆漁協南伊豆支所の青年部員数の推移

## 6. 波及効果

私たちの青年部は漁業に限らず、多様な業種の若者で平成8年に結成された。その流れは代々受け継がれており、現在も多様性が保たれている（図8）。水産教室は子供たちを楽しませるエンターテインメント性も必要となるため、遊漁船業、ダイビング案内業、渡し船といった観光業に精通する部員がいることで、企画の質が向上している。例を挙げると、沖釣り体験の際は遊漁船業に従事する部員が、シュノーケリング体験の際はダイビング案内業に従事する部員が活躍をする。このことは、部員内の一体感を強化し、業種を超えた部員のつながりを形成している。このつながりは青年部卒業後も維持されており、当初の目的である部員内の「異業種間の交流」を超えて南伊豆支所全体のまとまりに貢献している。

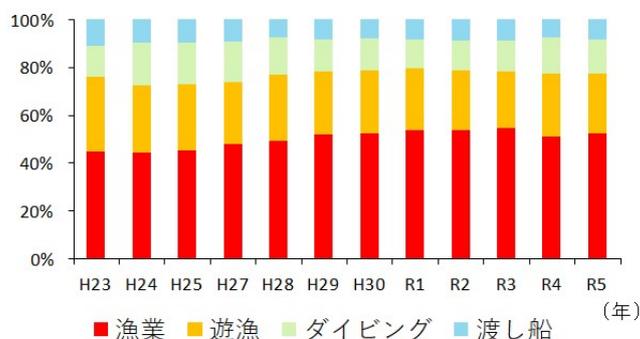


図8 青年部員の業種別従事率（兼業込み各従事者数／延べ従事者数、H26はデータなし）

## 7. 今後の課題や計画と問題点

これまでの活動を振り返り、今後について話し合った結果、「①クルージングや磯遊びにて安全な遊び方の講習」「②南伊豆町内でのさまざまな地区での開催を引き続き行う」「③ブダイなどの藻食魚を活用した味噌汁づくり」という3つの案が出てきた。

①は、特に夏場にレジャーによる事故が頻繁に生じているため、子どもたちが安全に遊べるよう、潮の満ち引きや天候について学ぶ機会を設けるということである。②は、南伊豆町内でも複数の漁業地区があるため、それぞれの地区の魅力をより発信できるような内容を企画することである。③は、近年、カジメなどが消失する磯焼けにより、南伊豆にとって重要な磯根資源の水揚げ状況が悪くなっているため、藻食性魚類の消費拡大に少しでも貢献できるようにブダイなどを活用することである。なお、③については、伊豆漁協南伊豆支所とNPO法人伊豆未来塾が開催している植林活動「漁師の森づくり」のイベントの中で、令和5年1月に部員の一部が取り組みを開始し、参加者からは好評であった。

今回の水産教室の取り組みは、海の体験イベントといった要素が強い。さらに、私たちは漁業以外の業種の若者も広く所属し、近年、話題となっている「海業」と親和性が高いと考えられる。特に、業種的にも取り組み的にも、観光的な要素と親和性が高いと考えられ、従来連携をとっている南伊豆町教育委員会やNPO法人だけでなく、観光協会などとも連携をとることも考えられる。今後は、水産教室や漁師の森づくりイベントなどを通して、青年部が経営する遊漁船や渡し船、ダイビング案内業のPRも行い、海業の視点からもより一層、地域を盛り上げていきたい。